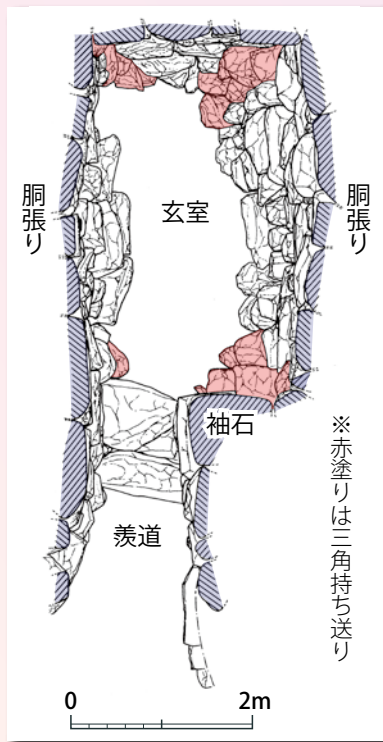


図1 巨勢山408号墳
横穴式石室見上げ図



※赤塗りは三角持ち送り

6世紀に入るところ、巨勢山古墳群では室(431号墳・432号墳)、西寺田(407号墳・408号墳)、朝町(71号墳・75号墳)の各所で、大変似通った規模と構造の横穴式石室墳が築造(図1)されました。いずれの石室も玄室幅2m強、玄室長4m弱で右片袖(奥壁側から入口を見て)の平面形

ふるさと御所 文化財探訪

其の三十八

古墳時代(26)
葛城県の成立
巨勢山古墳群の
性格③

文化財課
☎60-1608

となっており、玄室の側壁には胴張りが見られます。
また、石室の上方に向かうにしたがって壁を次第に内側に傾けて、空間を狭めていく石室構築技法を「持ち送り」といいますが、特徴的なのは石室を床面で輪切りにして見上げた図を作成すると、図1で示すとおり、奥壁と側壁など本来は90度で形成されるべき角に両方の壁を連結するかたちで斜めに配置される石材(赤塗りの石材)が存在することです。これを「三角持ち送り」技法と呼び、ドーム状の高い天井を形成し、天井石(408号墳では失われています)を小さなもので済ませるのに役に立ちますが、これも前述の古墳の横穴式石室のいずれにも共通する要素となっています。

副葬品にはミニチュアカマド形土器、銀製釵子(かんざし)、銀製指輪、鉄滓(鉄の鍛造時に出るカス)などが目立ち、これらは渡来人が葬られた古墳に特徴的に見られます。そして、これらの古墳は「号墳」の数字が近いことでも分かるように2基1対で築造される傾向があり、また、同一支群内では

図2 巨勢山407号墳の
横穴式石室



図3 巨勢山408号墳
横穴式石室奥壁部の
遺物出土状況

後に続く古墳が築造されず、系譜が途切れがちである、という特徴も併せ持っているようです。

当時の有力者にとって渡来人は、文字をはじめさまざまな技術をもたせられた大変貴重な存在でした。前号で取り上げた414・421号墳は6世紀後半の渡来人の葬られた一支群でしたから、渡来系集団の墓は存続しています。したがって、前述の巨勢山古墳群各所の2基1対の支群の系譜が途切れることは、この間に渡来系集団の再編が行われたことを示すと考

図4 巨勢山75号墳出土金銅装馬具



杏葉 (ぎょうよう=尻飾)

えてよいでしょう。
ここでも前号と同様、2基1対の渡来系集団の古墳を巨勢山古墳群の各所に築造させるべく墓域を与え、後にはそれらの集団を再編することのできる、「権威」の存在をうかがうことができます。

【参考文献】『巨勢山古墳群』Ⅳ、
2002年、御所市教育委員会 ほか

(文責 藤田 和尊)

